クラス担任のための Career Guidance
［キャリアガイダンス 特別編集］
2024 >> VOL.47
RECRUIT

「がんばれ」の言葉を越えて!?

生徒の心に火をつけるには

「生徒のやる気や意欲をいかに高めるか」。多くの先生が抱える根源的な悩みについて、慶應義塾大学の鹿毛雅治教授に伺いました。

取材・文／堀水潤一

入り口は外発的動機づけでも、内発的動機づけへ転化することも

「〝モチベーション〟という単語を書名に使った書籍は少なくありませんが、その最初は1916年発行の『学業のモチベーション』(H.B.Wilson)といわれています。つまり、近代学校制度が始まって以降、洋の東西を問わず、『どうすれば生徒の学習意欲は高まるのか』は、教師共通の普遍的な悩みであり続けてきたと言えるでしょう」

そう話すのは、自身も『モチベーションの心理学』という著書がある慶應義塾大学の鹿毛雅治教授だ。

ちなみに、モチベーションという言葉は一般に〝やる気〟や〝意欲〟とほぼ同じ意味で使われるが、学術用語としては明確な違いがあるという。

「やる気や意欲がポジティブなニュアンスを含むのに対し、モチベーションは価値中立的に扱われます。そのため、例えば犯罪に対して意欲という言葉を使うと違和感がありますが、〝犯罪のモチベーション〟という言い方はあり得るわけです」

敢えてこのことに言及したのは、モチベーション心理学は、客観的事実の蓄積の上に成り立っていること。そして、もたらされた知見は、やる気や意欲について語るときに陥りがちな、個人的体験に基づく思い込みを排除してくれることを強調したいためだ。

思い込みのなかでも特に根強いのは〝アメとムチ〟に関するものだろう。

「教育現場では、今なお賞罰に対する信仰が残っているところもあるでしょう。〝ニンジンをぶら下げたり、恐怖心を煽ったりすることで、やる気が高まると信じる方は少なくありません。即効性はあったとしても弊害(図1)も多いのです」

報酬を得るためや罰を避けるために生じるモチベーションの総称を〝外発的動機づけ〟と呼ぶ。人に何かをさせる方法として実感しやすいため、20世紀半ばまではモチベーション心理学の支配的な考え方であったという。

ところが、人の行動を促すうえで外発的動機づけだけでは説明できない現象が、動物実験を含めて次々指摘されるようになった。そこで登場したのが〝内発的動機づけ〟という考え方だ。行為自体が目的となるモチベーションのことで、とりわけ、興味関心に基づき、「知りたいから調べる」「好きだから学ぶ」など、学習そのものが目的となるモチベーションを指す。アメやムチがなくなった瞬間、行動しなくなる前者と異なり、中長期的な学びや成長につながることもわかってきた。

では、外発的動機づけは×で、内発的動機づけが○なのかというと、そう単純な話ではないと鹿毛教授は言う。

「教育現場において内発的動機づけが大事なことは明らかですが、外発的動機づけが教育的でないとも言えません。興味のないことを嫌々させられたものの、結果として、『ほめられて嬉しかった』『意外と楽しかった』などポジティブな感情が伴うことは珍しくありませんし、それによって行動が習慣化することもあります。試験のために選択した世界史の授業で、歴史を学ぶ意味や価値に触れ、学び自体に面白さを見出すなど、内発的動機づけへ転化することさえあるのです。そこそ教師の腕の見せ所。人生を豊かにする栄養価の高い教科を試験対策で終わらせるのはもったいないですから」

ほめることで、やる気は必ず高まるという思い込み

アメとムチの誤解同様、「ほめることで人はがんばる」という考え方も、一種の思い込みだと鹿毛教授は話す。

「ほめ言葉は言語報酬と呼ばれ、金銭以上にやる気を高めると言われますが、その働きは意外と複雑です。使い方によっては『なぜ、この人は私をほめるのだろうか』など、ほめる側の思惑を勘ぐるとか、『言いなりになるものか』と反発を招くなど、マイナスに作用することさえあるのです(図2)」

大切なのは、闇雲ではなく真価を認めたうえで具体的にほめること。それによってフィードバックの役割を果たすわけだ。そのためには生徒理解が欠かせない。教師一人ひとりが違うように、生徒も多様であり、その場その時によっても違う。教師一人では限界があるため、教員集団として、多角的な視点からほめることも重要だ。

やる気は環境に大きく左右される北風ではなく太陽型アプローチを

モチベーション心理学の研究によって、人のやる気は環境に大きく左右されることも明らかになってきた。

「童話『北風と太陽』で、太陽が勝ったのは、旅人が上着を脱ぎたくなる〝環境〟をつくったためです。相手に求めたいことを直接的にさせるのではなく、主体的に行動を起こしたくなる環境を整えるということです」

授業デザインでいえば、生徒の興味関心を刺激し、いかに引き込むようなカリキュラムにできるかどうかだ。

「ある中学校の歴史の授業では、平治物語絵巻を拡大コピーして各班に配り、気づいたことを自由に発表させていました。凱旋する武士の姿を恐る恐る眺めている貴族の表情に気づいた生徒は、変化する時代のダイナミズムを身をもって体感したことでしょう」

毎回は無理でも、ここはという単元で学ぶ意欲を刺激する工夫はできる。内発的動機づけなしでは成り立たない探究の時間であればなおさらだ。

「探究を総合型選抜のためのアメやムチにするケースもあるかもしれませんが、入り口は外発的動機でも、内発的動機に転化することもあるわけです。生徒をよく観察していれば『ここをつつくと食いつくはず』なんて感覚もおもちでしょう。教科の専門家としてのポテンシャルを活かし、探究の醍醐味を味わわせてほしいし、専門外であれば良き聞き手となり、『そんなことまで発見したんだ！』など真価を認め、具体的にほめる。あるいは『あの先生なら良いアドバイスをくれるのでは』と橋渡ししてもいいでしょう」

生徒の成長は教師の喜び教師のやる気は生徒に移る

冒頭、「生徒の意欲をいかに高めるか」が教師共通の悩みと述べたが、教師自身のモチベーション低下が問題になることも多い。この命題についての鹿毛教授の回答はシンプルだ。

「教師であれば生徒の成長は喜ばしいはず。つまり教師にとって最大のモチベーションは生徒の成長と言えるのではないでしょうか。その舞台となるのが日々の教室です。授業を通して生徒が成長することで、先生方のやる気も高まり、それが今度は生徒に伝染する。両者は合わせ鏡の関係です。にもかかわらず、教材研究や生徒理解の時間が十分に確保しづらい現状には問題があると言わざるを得ません」

生徒、先生双方のモチベーションを高めるためにも、教師本来の仕事に焦点化できるような働き方改革を進めていくべき、と鹿毛教授は念を押す。

［著書］
モチベーションの心理学
「やる気」と「意欲」のメカニズム
(中央公論社)

モチベーションはどのように生じ変化していくのか。モチベーション心理学の代表的理論を紹介しつつ、「ほめればやる気になる」などの素朴理論の落とし穴を学術的に解説。終章では、コロナ禍を経て変化した著者の新たなモチベーション観が綴られる。

鹿毛雅治教授
かげ・まさはる●慶應義塾大学教職課程センター教授。博士(教育学)、学校心理士。1964年生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門は教育心理学、教育方法論、教師教育。著書に『授業という営み』(教育出版)など。

図1 報酬(アメ)と罰(ムチ)の弊害

報酬(アメ)の弊害
- 信頼関係の構築が困難で、人間関係を破壊する。
- 表面的な改善が見られても、真の問題解決に至らない。
- 報酬に必要なだけの行動を行い、それ以上はやらない。
- 手っ取り早い最短の方法を選ばせる。
- 行動を続けさせるために、報酬を与え続ける必要が。
- コントロール下にある点で本質的には罰と同じ。

罰(ムチ)の弊害
- 望ましくない行動は減るが、望ましい行動が増えるわけではない。
- 効果は一時的で、罰が存在する場だけに限られる。
- 慣れてくると罰をエスカレートせざるをえない。
- 不安や恐怖などの感情に支配され不適応に陥る。
- 単に退避行動、逃避行動のみを促す。
- 不適切な行為(報復など)を引き起こす可能性。

図2 ほめ言葉のマイナス面

- 「こんなことでほめられるのは能力がないから」と邪推する。
- 「これでよいのだ」と成果を過度に正当化してしまう。
- ほめ言葉をもらうこと自体が目的になってしまう。
- 人によっては、プレッシャーに感じてしまう。
- 価値を押しつけられた気持ちになり、やる気が失せる。

※『モチベーションの心理学』を基に編集部で構成

高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための進路指導・キャリア教育専門誌
Career Guidance キャリアガイダンス

編集協力委員を募集中です

『キャリアガイダンス』はこれからも、最前線で進路指導やキャリア教育に向き合う先生方と共に誌面を作ってまいりたいと思います。毎号の読者アンケートや、年数回の編集部からのアンケートにご協力いただく編集協力委員にご登録いただきますと、『キャリアガイダンス』を毎号お手元にお届けいたします(年4回・無料)。進路指導やキャリア教育に関する最新のテーマやトピックス、独自の統計データなど読み応えのある内容となっています。ぜひ多くの先生方にご登録いただけますと幸いです。

バックナンバーの記事はWEBサイトからご覧いただけます！

キャリアガイダンス 検索

お申し込み方法
二次元コード、または下記URLよりご応募いただけます。※高校教員の方以外はご応募いただけません。
https://rec.fofa.jp/carigai/a.p/104/